

学校の統合

松山を歩く

今月末に140年の歴史を刻んだ匠瑛小学校が閉校となり、八日市場小学校に統合されることとす。同校の歩みを『八日市場市史近現代編』によりたどることにしましょう。

1889（明治22）年4月に7か村が合併し、戸数316軒、人口16226人の匠瑛村が誕生しました。この時、村内には松山と長岡の二つの学校がありました。

松山学校は1876（明治

9）年に、中台村の寺院を教場に教員1人、男子児童44人で開校しました。

1872（明治5）年の学制発布後、ほどなくして市域の主な村で寺院を教場に学校が開かれたのは、幕末からの私塾が発展したことによるものです。

当地域は当時、土浦（現在の茨城県）に県庁があった新治県に属しており、県下で2番目に作新学校（樺海小の前身）、3番目の福岡学校（八

日市場小の前身）、6番目の飯倉学校（豊栄小の前身）と開校が続きました。

現在の各小学校につながる学校の統合は、明治22年の新村誕生前後に行われました。

匠瑛村成立前は連合村編制の関連で、1883年に大浦と長岡の2か村で長岡学校を開きました。宮本村はこのころ八日市場村外4



140年の歴史に幕を閉じる匠瑛小学校の校門

か村に組み入れられ、新村成立時に匠瑛村に加わりました。国の小学校をめぐる制度の改変に対応して匠瑛村では、1892年に松山小学校を「匠瑛小学校」、長岡小学校を「匠北小学校」と呼び、匠瑛小学校となる両校の統合は1902年でした。当時の在校生の思い出に、「匠南の校舎は茅葺き屋根で農家並みの質素な建物でした。北西側は崖の山林で、冬ともなれば、寒風に悩まされわら囲いをして防ぎました。そのため『納豆学校』と呼ばれた」とあります。

1902年の匠瑛小学校の児童数は295人、就学率は90パーセントを超え、村の予算の約半分が教育費に充てられました。

匠瑛村の中心地の現在地に新校舎が完成したのは、1909（明治42）年でした。それまでは「教室を真ん中で区切り、1年生は左側、2、3年生は右側で、3人の先生が1教室の中で教えていました」と、当時の児童が回想しています。

（市文化財審議会委員・

依川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080